



【Productive Aging】

生き生きと老いる

人類の悲願であった長寿を、世界に先駆けてかなえることのできた日本。

平均寿命は男女平均では83歳、健康寿命も75歳を超えて、日本人は元気で人生90年を迎えることが夢ではなくなっている。百寿者も既に5万人を超えているが、彼らが生まれた100年前の日本人の平均寿命は40歳台であった。

この100年間の寿命の伸長は、まさに戦後日本の平和と繁栄の象徴であり、日本人の懸命な努力の賜物である。

しかし今、私たちはこの世界に誇るべき大長寿時代を前にして、戸惑いと錯誤の中にいる。

日本では戦後の近代化、高度経済成長化に伴い少子化が進み、1997年にはついに高齢者と子どもの人口比が逆転することとなった。

この少子化の勢いには歯止めがかからず、2055年頃には人口比率は、若・中年者5、高齢者4、そして年少者1となることを見込まれている。

長寿化と少子化が組み合わされて、人類が今まで経験したことのない全く新しい社会が、これからの日本に出現する。社会の急激な変化は私たちの暮らしにも、否応なしに大きな変化をもたらすだろう。

しかしどのような変化の中でも、一人一人が当事者として自分の老いと誠実に向き合い、日々の暮らしの充実をめざすこと、良き市民として社会とつながりながら、生き生きと暮らすことが大切なのは変わらない。

個人は、企業は、社会は、どのように考え、いかに行動したらよいのか。

ILC創設者のロバート・バトラー博士が掲げた“Productive Aging”の切り口で、日本と世界のさまざまな事例や取り組みを紹介しておきたい。